

て、汁をしほり、其汁へ醬油を加へて（一合のお
ろしに、醬油二勺合する）かくべし
皿へ、鯖を盛つて、おろし汁を、上よりかけて出
すべし

小皿肴

湯引鳥賊、いり菜

鳥賊を洗ひて、ふくろを切りてひらき皮をむきて
細く切り、鍋に湯を煮たて鹽を、水一合に鹽五匁
入るゝ入れたるに鳥賊を一寸入れ、直に箸にてと
り上げて水に取りて、すぐに取上げ、小皿に盛る
べし
いり菜は、鹽漬にしたる、菜漬を能く水にて洗ひ
て、それをよくしほりて、細かにきざみて、鍋に
入れ、醬油を加へて、七色唐がらしをも加へて、
共にいりつけて取上ぐるなり

四十
菜の 一かぶに醬油一勺餘、七種蕃椒一匁内の三
色の割合にてよし

貞一の日記 (承前) (明治廿六年五 月 出生男兒)

その 母

七月六日 母さんはんはときけば、エンく、と
いふエンく行つて何するのととへば、フ、
と口拍子にて雁の歌を、調子を正しく歌ふ、
夕刻父母と、下田氏を訪ひ、四つばかりの可愛
らしき女の兒、遊びに來て居られたり貞一は喜
んで、御友達にしようとし、一所に母さんに、
抱かれようと、自分先つ母の膝に腰かけ、御友
達の手を引張る、先方はまた恥かしがりて中々
傍へよらず、奥様繪端書など出して、もてなし
て下されしに他には目もくれず、電車のを見

て、直ちに電車くといつてよろこぶ

タヌキ、ウサギ、リス、を繪本にて、云ひならふ。

七月八日 此頃は、語尾によくンの音をつけてい

ふ、サンボン(散歩)ウンドン(運動)チヨンチン

(提灯)ウンコン(大便)等の類なり

七月十一日 今日大學へ 天皇陛下行幸あり、安

田さんに連られて拜しに行く、往復とも歩るく。

井上牧師來訪せらる、イヌ先生くといふ井上

先生といふつもりなり。

七月十三日 朝父さんと、馬術練習所へ見に行き

歸宅後、御馬の口はときけば、口をバクくさせ

せる、馬の口を動かしたるを觀察したるなり

『黒い御馬』と云ふ語を覚えたり。

七月十四日 父に伴はれ、生駒氏を訪ふ、八重子

さんと(貞)より小ざき兒ビスケットをとりあ

ひす、先方はずんく喰へても貞一は喰へつ

けぬ故、たいおもちやにして居る。

外へ出て、家にかへりたくなると、雨コンく

カヘンといふ、何日か、雨の降り出しそうにな

りし時、安田さんが、雨が降るといけなから

歸ろうと云ひしを、覺えて居りしなり、

七月十五日 父と馬術練習所へ行き、馬に向つて

御馬頂戴と、手を重ねまたダツコくなどいふ

車を見れば、ガアくのとつといふ。

今日は土曜日とて、學校より早く歸りし母晝寢

よりさめしばかりの貞一の傍へ到れば『カフサ

ンオウチ』といつて嬉しそうに抱きつく。

七月十八日 父と小原先生へ行つて、体重を計つ

て頂く、一〇三二〇、あり

コチロン、オユヤ、ミヅ、エンコ、クワシなど

「い、ならん、」

七月廿一日 朝母と散歩に出つ、途に四才ばかりの女兒、竹の棒を持つて、遊び居れり、貞一傍により、なつかしげに手を出す、女兒はイヤガツテ泣き出す、貞一はダツコ〜といひ、又ようじ頂戴といつて竹棒をとりに行く、小揚子より連想して、竹切を揚子と思ひしなるべし。

七月廿三日 外で遊んで居つて、家に歸りたき時は『オウチカヘン』といふ、自分より年長の子供を見れば、『大きいあかちやん』といふ、小さい子供を見れば、直に其傍へはしりゆき、顔を其の子の顔に、さしつけて、一所に遊ばんといふ様な様子をなす、先方の子は、見馴れぬ子に、余りなつかしそうに、手をとられたりするもの故、氣味悪るさうに、逃げ出す。

七月廿四日 ふと君が代の『さ、れいしの』といふ所だけを唱ひ得たり、モーペンといふ、もう一遍のつもりなり、朝顔をアサゴンといふ。

七月廿五日 此頃は門の内の段々を、上り下りする事を何よりの楽しみにせり。

御隣のふく(狎の名)は、いろ〜藝が上手なれと、うちのボチ(家によく來る黒い小犬)は何もしらぬから、教えておやりといへば、何を思ひ出したのか、ゾーホン(象のついでる繪本)といつて取つて來て、庭の溝板の上にはろげ、トラ、ムーンなど、繪をさして一々ボチに見せる、ボチは、面白がつて、本をくわへて、引張りまわさうとする、貞一は熱心に、教えやうとする西洋の繪葉書の畫題ともなり相な幕合にて、隨分大騒なりき(以下次號)